

研究課題	言語発達障害児の語形成に関する知識の特徴－語彙的複合動詞と統語的複合動詞に視点を当てて		
氏名	村尾愛美	所属	総合教育科学系特別支援科学講座
		職名	講師
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 ☒ ←受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】 （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度） （目的） 言語発達障害の一種である特異的言語発達障害（以下SLI）では、語彙的側面は形態統語的側面に比して良好だと報告されている（Paradis & Gopnik, 1997）。このことは語形成にも当てはまるだろうか。語の中に統語構造をもつものとして、統語的複合動詞がある。一方、語彙的複合動詞は、そのような構造をもたないとされる（影山, 1999）。これらのことから、SLIの疑いがある言語発達障害児の複合動詞の音読においては、語彙的複合動詞に比して統語的複合動詞のほうで読み誤りや自己修正などの非流暢性が多く見られると予測する。そこで本研究では、SLIの疑いのある言語発達障害児を対象として、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の音読の特徴に差が見られるかどうかを明らかにすることを目的とした。			
（方法） 1）対象児 対象児は、言語発達の遅れを主訴として言語障害通級指導教室（「ことばの教室」）に通室する小学3、4年生の児童3名（A～C児）であった。3名中2名については、読み検査課題を行い著しい読み困難がないことを確認した。また、残りの1名については、通級指導教室の担当者への聞き取りから著しい読み困難がないことを確認した。なお、本研究のデータ収集は、保護者から書面による同意を得て行った。			
2）手続き 実験は個別に行った。複合動詞の前項動詞と後項動詞の音読課題（動詞音読課題）と複合動詞の音読課題（複合動詞音読課題）の2課題を行った。複合動詞の刺激語は、前項動詞（例：とぶ）、後項動詞（例：まわる／まくる）の1音目の音節、モーラ数を統制した語彙的複合動詞（例：とびまわる）と統語的複合動詞（例：とびまくる）の組が6組、計12語であった。動詞音読課題は前項動詞と後項動詞、計18語であった。両課題とも、ディスプレイに注視点を1500ミリ秒呈示した後、クリック音と共に一語ずつ刺激語を呈示し、音読するよう求めた。なお、刺激語はすべて平仮名で提示した。対象児の反応はICレコーダーで録音した。			
3）分析方法 語彙的複合動詞と統語的複合動詞の音読における、読み誤りと非流暢性を分析した。			
（結果と考察） 複合動詞音読課題において、A児では読み誤り又は非流暢性が統語的複合動詞で2回観察された。B児では語彙的複合動詞のみに1回、C児では統語的複合動詞と語彙的複合動詞それぞれ3回ずつ読み誤り又は非流暢性が観察された。動詞そのものの音読が読み誤り又は非流暢性に影響した可能性のある反応は、B児とC児に1回ずつ観察されており、いずれも語彙的複合動詞であった。これらの結果から、SLIの疑いがある言語発達障害児の中には、複合動詞の音読に困難さを示す者が存在する可能性が示唆された。しかし、読み誤り又は非流暢性の特徴のみでは、語内の統語構造がSLI児の音読に影響を与えるかどうかは不明なままであった。今後の課題として、反応潜時及び反応時間を用いた詳細な分析と定型発達児との比較が必要であると考える。			
【研究成果発表方法】 さらに対象児を増やしたうえで、本研究の成果を国内の学会で発表し、コミュニケーション障害学に投稿する予定である。			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。